



遺言・葬儀・墓地

すぎもと よしお
杉本 良夫 ●ラトローブ大学名誉教授・社会学

オーストラリアに住みついて、まもなく半世紀になる。日数にすると、優に1万5千日を超えた。長い時間が経ったものだ。

当初は数年だけ暮らすつもりでいたので、借家暮らしだった。ゆっくり腰を落ちつけようと思うようになって、はじめて家を買ったのが、37歳のとき。以来、3人の子供が成長するにつれて、小さな家から大きな家へ買い換えてきた。全員が巣立ったので、こんどは夫婦二人で暮らすのに十分な広さの平屋に移った。「ダウンサイジング」といって、生活の小型化である。いま住んでいるのは、当初から数えると5回目の住居になる。家族の状況に合わせて、家を何回も売り買いすることは珍しいことではない。

そんな過程で気がついたのだが、多くの人はかなり早い時期に遺言を書いている。「若いのに縁起でもない」などとは考えない。私たちが40代の頃、最初の遺言を書いた。もちろん、家屋だけでなく、全ての財産についての割り振りについて、持ち主の意思を書き残しておくわけだ。私たちの場合、中身はとても簡単なものだが、事情に応じて少し書き換えたりもした。弁護士の前で署名して、原本は彼女の事務所に保管してある。

高齢化が進むだけでなく、離婚率も上昇の一途だから、こういうことは合理的に事を進めておいた方がいい。いわゆる事実婚も増えている。友人

などに聞いてみると、最初の遺言を書いたのは、はじめての子供が生まれたときか、家を買ったときだという人が多い。

人が亡くなると、何らかの形の葬儀がある。簡易な家族葬や親しい友人を交えた告別式が普通だ。最近では「死者を悼む」とか「亡くなった人を偲ぶ」というよりは、「生前の功績を祝う集まり」が増えている。数か月前に亡くなったボブ・ホーク元首相の国葬も、彼の「生涯の偉業祝賀会」と銘打って举行された。

昔は葬式といえば、黒い喪服を身にまとって出席する人が多かったが、最近では華やかな服装の参加者が主流となった。カラフルな衣服を着て、明るい気持ちで死者を見送ってあげたいという気持ちからである。普段着の出席者も少なくない。

もっとも、黒づくめの葬儀もある。わが家の近くにあるギリシャ正教会の教会では、ときおり、そうしたスタイルの葬式も行われていて、ことは一律ではない。

これらはキリスト教の流れをくむ都市中間層の話だが、オーストラリアは多民族社会で、いろいろな文化的伝統が根付いている。アボリジニと呼ばれる先住民の葬儀は、多くの場合「いぶし儀式」から始まる。屋外で煙を起こして、亡くなった人の霊を、その人が住んでいた地域から追い払う儀式である。先住民の間には、死んだ人の顔や姿を、



写真やビデオで目にすることを忌む慣習があるらしい。ときどき、テレビ番組の冒頭に「この番組には死者のイメージが現れます」という先住民向けの事前警告テロップが出てくることがある。

多民族といえば、墓地の景観にも、そのことがよく現れている。南ヨーロッパ出身と思われる人たちの墓石は、豪華なものが多い。名前が金色で彫り込んであったり、大きな写真まで埋め込んであったりする。これに比べると、アングロサクソン系の人たちの墓は小ぶりで、飾り気がない。墓石が立っているのは、そのほとんどが土葬の場所だ。火葬された遺体の場合、遺骨や遺灰は壺に入れられて、墓場の一角にある集合安置所に置かれるか、遺族の希望する場所に移される。先祖代々の墓は、ほとんど見かけない。近頃は墓地のスペースが足りなくなり、何十年と期限を切って場所を貸すリース方式も現れてきた。

キリスト教の伝統的な埋葬法は土葬だが、最近では全般に火葬を望む人が増えている。散骨を希望する人も少なくない。海や川へ粉骨を撒くという方式を選ぶ人もある一方、墓地の一角に庭園があり、そこに植えた樹木の下に灰を埋めてもらうという形式を好む人もいるようだ。

多民族社会は多宗教社会でもある。いろんな宗教の施設が建てられて、そこが信者の寄り合いの場所にもなっている。近年はイスラム教徒も増え、

モスクを建てたいという申請が信者から出てくる。地元市民の間には、テロの温床にならないかと懸念する声も根強く、許可に対する異議申し立てが起こったりしている。逆に、韓国系の人たちにはキリスト教徒が多く、寄付を募ったりして教会を買い取ったというケースもある。そうした教会の壁には、ハングル文字が埋め込んであることもあり、目に鮮やかだ。

オーストラリアに住む日本在住者は、あれこれ10万に及ぶので、当然こちらで人生を終える人もいる。その家族が仏式の葬儀や法事を望む場合も少なくない。十指に満たないが、日本から派遣されてきた僧侶や日本で資格を取ったオーストラリア人の坊さんがいて、そうした人にお経を上げてもらったりしている。もっとも、日本人たちの寄付などでお寺が建ったというようなことは、耳にしない。日本人があまり集団主義的でない一例だろうか。

遺言、葬儀、墓場など、死と関わる慣習は日常の話題に上ることは少なく、普段の生活から隠れている。それだけに、こうした世界は、さまざまな人びとの価値観の深層を映し出しているともいえるだろう。長くオーストラリアに住んで、その一面がやっと見えてきたという気もする。